

恩人の写真を持つカンガス神父



二千八百万円の寄付

サビエル生誕五百年

巡礼の道

176

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

カンボジアの貧しい人たちを支援するバタパン友の会は二〇〇一年に結成された。いろんな分野で支援活動をしているが、最も大きな事業は学校の建設で、これまでに十三の学校を建てた。今回、そのうちの一つを訪れた。

カンボジアの貧しい人たちは子どもがいまぜん「から」と、これだけの寄付をしたのだ。いくら子どもがいなとはいへ、二千八百万円もの大金を全く知らない他者のために寄付するなどできることではない。そして、本人の希望で名前も公表してないという。

この老夫婦は一度もカンボジアを訪れたことはない。そこでカンガス神父はカンボジアを訪れる際はカパンの中に老夫婦の写真を入れてくる。

「清貧、貞潔、従順」の誓願を立て、生涯独身で神のため、すなわち他者のために働き、やさしく誠実に誰からも信頼されているカンガス神父の存在が支援者を引きつけ、老夫婦のような行いを生む。スタディ・ツアーにも今回で実に七回も参加し、新しい参加者の世話をする中年女性が二人いることでも神父への信頼の厚さがわかる。

カンガス神父は「もちろん大金の寄付は有り難い。でも金額の大小に関係なく、支援して下さるすべての人が恩人です」と言う。

聖書に出てくる「やもめの献金」の話思い出した。

金持ちがお金を献金箱にたくさん入れた。貧しいやもめがわずかなだけを持っていてすべてを献金した。

イエスは「貧しいやもめは誰よりもたくさん入れた。金持ちは有り余る中から入れたが、やもめは乏しい中から自分の持っているすべてを入れたからである」と。

老夫婦の献金は金額は大きい、やもめの行為と同じである。カンガス神父がこっそり見せてくれた一枚の写真で心が洗われる気分になった。

バタパン友の会はカンボジア支援ではあるが、我々日本人にも生き方の指針を示しているように思える。

残念ながら学校は休みで、期待していた給食の様子は見られなかった。実は数日前に訪れた村の集会所の給食風景が頭から離れず、学校給食の様子を見たかったのだ。

老夫婦のことを頭に浮かべながら来年また来ようと決めた。それは貧しいカンボジアのためではなく、自分自身の生き方のために。（元山口放送取締役ラジオ局長）



貧しい村の週に一度の給食